

Importance of songs and dances in the Indigenous People's Summit

Edgar W. Pope, professor of Aichi Prefectural University

The World Indigenous Peoples' Summit in Aichi 2010, whose main theme was the close relationship between biological diversity and cultural diversity, was itself a display of cultural diversity. Academic scholars from various fields appeared side by side with activists, cultural leaders, and representatives of indigenous peoples' organizations. Academic presentations of fieldwork results and historical studies appeared side by side with stories, rituals, narratives of personal experiences, and appeals for solidarity and action. The diversity of events, ideas, opinions, approaches and presentation styles was amazing and enriching for everyone.

Cultural diversity also appeared in the form of music and dance. A "summit" in the modern political world is usually a "speaking" affair; but in this case a "Festival of Musical Exchange" formed a major part of the event. Each of the four days included performances which showcased the diversity of the world's music and dance, and which involved many of the same participants as the "speaking" part of the summit. There were several activist-musicians who sang as eloquently as they spoke, and many "dancing scholars" could be seen as well!

It seemed appropriate that the "Festival of Musical Exchange" was an inseparable part of the summit, since music and dance have been an inseparable part of traditional everyday life for many indigenous peoples. It occurred to me that music and other performing arts are in fact one important area where cultural diversity and biological diversity are interconnected. As several presenters pointed out, the sounds and movements of birds, insects and other animals, of wind and waves and other natural phenomena, are often represented in the music, dance and stories of indigenous peoples. Moreover, the materials for making indigenous musical instruments come originally from the natural environment. Thus the sounds of instruments and the processes of making them, as well as the content of songs, stories and dances, connect people's daily lives to the diversity of plants and animals around them. Traditional performers express the value and diversity of their natural environments through sound and movement, and in this way they help to maintain the environmental consciousness of their cultures.

The performances at the summit showed that indigenous peoples are working to preserve and pass on these valuable traditions of music and dance inherited from their ancestors, while also revitalizing those traditions with new musical elements and new styles. In the performances of the Ainu Arts Project, for example, electric guitars shared the stage quite naturally with traditional Ainu instruments such as *tonkori*. I was reminded that, as several summit participants pointed out, globalization is not necessarily the enemy of traditional culture. Indigenous people can and do use globalization as a source of new elements with which to enrich their traditions, and as a source of new technologies for transmitting traditional culture. The music and dance performances at the summit showed clearly how indigenous peoples continue to treasure their unique cultural identities, while also being active and creative participants in the modern world.

「先住民族サミット」における歌や踊りの重要性

エドガー・W・ポープ（愛知県立大学外国語学部教授）

「先住民族サミット in あいち 2010」の主要なテーマは生物多様性と文化的多様性との密接な関係だったが、サミット自体が文化的多様性の表現だったといえる。さまざまな専門分野の学者が先住民族のリーダーや活動家と並んで発表したし、発表の内容はフィールドワークや歴史的な研究の結果から個人的な体験や物語、活動への呼びかけまでさまざまだった。アイデア、意見、発表のアプローチやスタイルの多様性のおかげで参加者全員にとって新鮮で有意義なイベントになったと思う。

文化的多様性は音楽と舞踊という形でも現れた。現代の国際政治界では「サミット」といえば「話」がそのほとんどを占めるものだが、この場合は、さまざまな民族の音楽と舞踊が迫力豊かな「マウコピリカ音楽祭」も中心に位置づけられた。サミットの4日間毎日行われた音楽祭では、サミットの「話」の部分と共通の参加者が多かった。歌も話も巧みになさった音楽家兼活動家も数人いたし、「踊る学者」も数多く出現した。

音楽と舞踊は多くの先住民族の伝統生活に不可欠なものなので、「先住民族サミット」にも不可欠なものとなったのは適切だと思った。そして音楽など伝統芸能は生物多様性と文化的多様性の重要な接点ではないかと思うようになった。サミットのいくつかの発表でも言及されたように、鳥や虫、哺乳類など動物の鳴き声や動き、波の音、木や竹の風での動きや音などが、先住民族の歌や舞踊、そして物語の内容で表現されることが多い。また先住民族の楽器の音も動物の声を模範にすることが多いし、楽器の材料も自然環境、すなわち周りの動植物から採るものなので、楽器の音も作成過程も日常生活と生物的環境とのつながりとなっている。伝統音楽や舞踊は音や動きを通して自然環境の多様性とその価値を表現することによって、その文化の環境意識を維持することにも貢献している、と思った。

さらにサミットの音楽祭で示されたのは、先住民族が祖先から受け継がれた貴重な伝統を大事に守っていると同時に、その伝統に新しい要素を取り入れて新生命を与えていることだ。たとえばアイヌ・アート・プロジェクトの演奏ではトンコリとエレキ・ギターが主要な弦楽器として自然に肩を並んだのはその一例だった。いくつかの発表でも指摘されたが、グローバル化は必ずしも伝統文化の敵ではないと思った。先住民族はグローバル化を利用して伝統文化をさらに豊かにすることもよくあるし、伝統文化を伝達するための新しい技術を手に入れることもある。先住民族の人々は自分のユニークな文化的アイデンティティを大事にしなが、現代世界の中で活躍しそのアイデンティティを活発に表現していることが、「マウコピリカ音楽祭」で明らかになった。

マウコピリカ音楽祭に参加して

藤戸裕子（ミナミナの会代表）

私たちミナミナの会はマウコピリカ音楽祭で、皆さまに本来のアイヌの姿を見ていただきたく、参加しました。皆と一緒に！楽しく！

繋がりを持ち！一人が皆のために！皆が一人のために！

伝える！共感を持つ！輪を繋げる！

子供も一緒に参加する。

そうして次の世代へも伝えていく。

本来のアイヌ民族の伝え方も参加者の皆さまに見ていただき感じていただきたく、ステージの上にもメンバーの子供も上げ、一緒に参加させてもらいました。

メンバーひとりひとは心をつにして、カムイへ向けてウポポを唄い、踊りをさせていただきました。

マウコピリカ音楽祭に参加できたことの喜びと繋がりへの感謝をこめて。

参加させていただいた3日間はアイヌ民族以外の民族との繋がりももてました。

そのなかで感じたのはどの民族も思いは一つであること！

そして皆明るい！！

1日目は

5名+子供1名のメンバーでさせていただきました。

マウコピリカ音楽祭初ステージで、参加されている皆さんと一つになりたかったのが初めにあいさつの踊り、そして、ねずみ獲りのあそび（参加されている皆さんにも一緒にさせていただきました）、他をさせていただきました。

大阪から3名、名古屋から親子で、東京から1名。

2日目は

6名+子供3名のメンバーでさせていただきました。

旭川のウコウク（輪唱）やアイヌ民族独特の髪の毛を揺らす踊りフタレチュイ、他をさせていただきました。

大阪から2名、名古屋から2名子供3名、東京から1名、旭川から1名。

3日目は

5名+子供2名のメンバーでさせていただきました。

カムイノミ後、輪踊りをさせていただきました。

ステージでは、アイヌアートプロジェクトを巻き込みクーリムセ、他をさせていただきました。

大阪から2名、名古屋から1名子供2名、東京から1名、白老から1名。

3日ともにメンバー全員での練習は一度もできずの本番でした。

でもそれが本来のやり方であり、その場で教わる体で覚える。

失敗は恐れず、メンバーは楽しんでカムイだけを感じ心を繋げ出来上がったステージだったと思っています。

今回マウコピリカ音楽祭に参加できたことをメンバー全員心より感謝しています。

ありがとうございました。

そしてこれからも繋がりあえることを願っています。